

「出雲国譲り」が目指したもの

白崎 勝

1、はじめに

今回の発表の課題は「出雲の国譲りは本当に有ったのか？」の問いであるが、これの証明にはあまり多くを要しないので、なぜ天照大御神は「国譲り」を迫ったか、その動機を考えてみた。力づくでないのは、出雲が弟の須佐之男命が国造りしたための遠慮にも見えるが、そうではなかった。力づくで出雲を取り込めば、必ず力で取り返す戦いが生まれ、果てしない戦いの世が続くことになる。これを避けたのである。

2、「出雲国譲り」の証明

記紀については、藤原氏による捏造の考えが多く見られ、記紀の記述からでは証明にならない。記紀の記述を、考古学を含めた別な事実から証明する必要がある。また犯罪捜査と同様に、なぜ国譲りを迫ったのか、その動機の解明も重要であり大国主命・事代主が了解した理由も必要である。

記紀は「出雲国譲り」に反対した建御名方神が、諏訪に逃げたことを記している。建御名方神と、後を追った建御雷神は長野善光寺付近で戦いになったと伝わる。ここで負けた建御名方神は、上田を経て諏訪に逃げたが、ついに降参し「この地を除きては、他所にいかじ。この葦原中国は、天つ神の御子の命のまにまに献らむ。」と述べたことで「国譲り」は完了した。

この一言が、命乞いのための一時的な嘘であってはならない。高天原は簡単に言葉を信用したのではなく、代をつないで末裔たちが諏訪から出て兵を起こさないか、監視していた事実が分かった。



図1 諏訪を監視する竜

図1は諏訪を取り巻く、竜とつく地名の分布である。

- ① 諏訪から南に、出れば山梨盆地の入り口に竜王町が見つかる。
- ② 諏訪湖から川での脱出は、天竜川になる。
- ③ 天竜川の諏訪湖出口には、辰野町（たつのまち）が見つかり、この辰は干支の辰で、竜のことである。
- ④ 長野を経て、上越、新潟への脱出口には志賀高原の竜王山がある。
- ⑤ 塩尻峠を越えた先は、安曇野である。

ここで竜王とは、山幸彦の妃・豊玉媛の父の豊玉彦のことである。図2はその系図である。豊玉彦は、ニニギと同世代とおもわれる。

記紀は国譲りが終わったので、ニニギの命が天孫降臨したと記していて、国譲り時代に生きた二人である。

豊玉彦は別名、海神、大綿津見神、あるいは竜宮城の主・竜王とも呼ばれている。博多湾の志賀島が海神の出自・安曇族の本拠地である。

図3は竜（龍）王山の分布で、2種の竜の文字が用いられている。志賀高原の竜王山のみ一つ離れたところにあるのが分かる。安曇の人たちが、建御名方神やその末裔の諏訪脱出を監視していたものと考えている。その痕跡が竜や安曇の地名として残ったと推測した。

諏訪神社の四方にある御柱は、この社から出ないことを示す结界ともいわれている。また諏訪の神は、神無月になっても「出雲に行かない神」とのことである。厳しく諏訪を出ない約束を守っていると思われる。

このように、出雲国譲りの痕跡が、地名、神社の祭り、しきたりとして残っていて「出雲国譲り」を否定しては説明がつかないことである。「出雲国譲り」があった証と考えることができる。

3、国譲りが目指したもの

では、「高天原」の天照大御神はなぜ「国譲り」を要求したか、何を目指していたのだろうか。出雲の国を造った須佐之男命と天照大御神は、伊邪那岐、伊邪那美命の子供で兄弟である。

伊邪那岐・伊邪那美命は、神々の命により船で東に進み、瀬戸内海東部の淡路島、四国、吉備、近江、泉南などの開拓にあたったと考える。これが国生みと表現されて大八島生成となったのだろう。

したがって、須佐之男命と天照大御神は国生みの最中、おそらくは四国の徳島で生まれたと考えている。さきほどの全国の竜王山の分布図は、瀬戸内海東部に多く見付き、この竜（龍）王山は国生みが終わったのちに豊玉彦が高天原の要請で、国生みの足跡を記録したものと考えられる。分布図をよく見ると、国譲り前に大国主命が、進出した出雲はもちろん播磨、丹波、越国、吉備西部などが空白になっていることが分かる。国生みの空白地に進出していたのである。

須佐之男命は、熊野との関係が深いようで、出雲の熊野大社に祀られている。須佐之男命は子供の時、熊野で母・伊邪那美命の事故に遭遇し、それで泣き虫ながら母思いの子に育ったものと思われる。そのことが、熊野速玉大社の祭りとして残されていることが分かった。

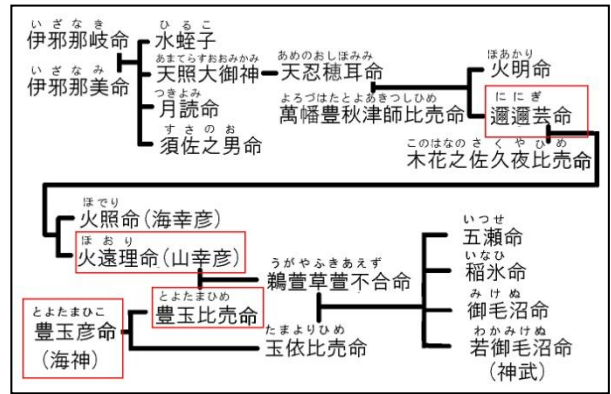


図2 豊玉彦の系図

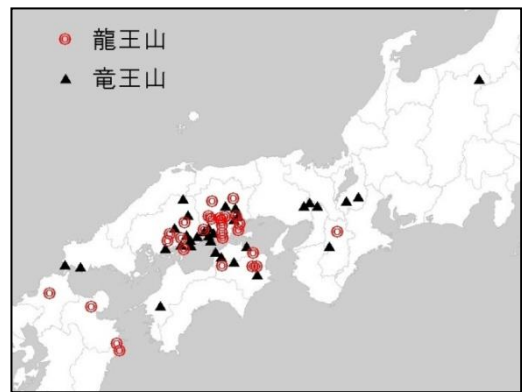


図3 竜(龍)王山の分布

熊野速玉大社は、伊邪那美命を祀っていて、命を御座船で急ぎ運ぶ、御船祭りが 1800 年前から続いている。これは事故に遭った伊邪那美命を熊野から国生みの本拠地、阿波に急遽運んだことが祭りとして残ったものと思われる。熊野速玉大社の神宝館には御座船と同時に、船を漕ぐ幼児の像が残されていて、これは須佐之男命が小さいときに体験した出来事と思われる。



写真1 稚児像

一方、天照大御神は、「出雲国譲り」の前にこう述べて、天子降臨を行っている。「^{とよあしはら}豊^{ちあきながい}葦原の^{ほあき}千秋長五百秋の水穂国は、我が御子・正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知らず国ぞ」

天照大御神のこの強い統治意欲は、国生みの中で生まれ育ち、葦原中国と呼ばれる瀬戸内海東部の開拓に、自ら携わった経験から来たものと考えられる。

4、「しらす国」と「うしはく国」

幾人もの国譲り使者を派遣し、最後に「出雲国譲り」に向かった建御雷神は、稲佐の浜で大国主命に国譲りを迫った。

「天照大御神、高木神の命を持ちて、問ひに使はせり。汝がうしはける葦原中国は、我が御子の知らず国ぞと言依さしたまひき。故、汝が心はいかに。」

ここで「うしはける国」の意味であるが、「うし」は大人と書き国の主のことである。はくは、いまも靴を履く、ズボンを履くというように、身に着けることで、大国主命が治める国は、国の民や収穫を自分の持ち物として勝手にしていると、高天原は、痛烈に批判したのである。

うしはくの国

1、うし:大人 国の主のこと
2、はく:履く 身に着ける

意味
大国主命が、国の民や収穫を自分の物として、勝手にしている。

図4 うしはくの国

一方、高天原は、「しらす国」でなければいけないと言っている。この意味が今一つ、理解できないが、あるサイトでは

「しらす」は情報の共有だと言っている。私は導く、教える意味が強いと考える。君主である御子が、国の進むべき正しい方向を教え、導く国さらに先導する国のことと考えた。

大国主の名前そのものが、うしはくの国を表していて、高天原は、このまま大国主命が亡くなれば、御子達による戦いで次の大国主が生まれ際限のない戦いが続く世になることを憂い、これではいけないと「国譲りによる」全国統一をおこない「しらす国」づくりを目指したものと考えられる。

しらす国

1、しらす:知らず 情報の共有
導く、教える

意味
君主が、国を正しい方向を教え、導く国。先導する国。

図5 しらす国

その結果が、世界に類をみない 1800 年に及ぶ君主国が生まれ、続いた原因と思われる。今の世界の多くは、「うしはくの国」と思われ、中国の歴史を見れば明らかなように、戦いで国を取ったものが独裁的に国を治めてきている。

5、出雲の国造り

記紀によれば出雲の国づくりを始めたのは、高平原を追われた、須佐之男命だった。母の国・根の国に向かう途中、足名椎夫婦に出会い、ヤマタノオロチを退治することから始めた。

このヤマタノオロチは製鉄に関する伝承の見解もあるが、この地の伝承を丹念に訪ね歩くと、斐伊川の洪水対策であったことが見えてきた。

図6は雲南市のオロチ退治した付近で、斐伊川と赤川が合流する付近の山、斜線部分が張り出していて、洪水の原因となっていたので、取り除く対策工事をしていた。

対策工事は完了したが、足名椎は、まだヤマタノオロチが原因と考えているので、これを退治しなければ納得しない。そこで、ヤマタノオロチを退治し尻尾から「天の群雲の剣」を取り出したと、大芝居うったものと思われる。

その後、根の国（安来市）に向かう途中でも、須賀で妻の櫛稲田姫と開拓にあたっていて、須佐之男命は母・伊邪那美命と同じ開拓による国造りを目指していたことが分かる。図7は須佐之男命が韓国から戻り、根の国に向かった経路を示したものである。



図6 ヤマタノオロチ伝承分布



図7 根の国への経路

図8は出雲風土記に登場する、須佐之男命と神産巢日神の御子達の、派遣先をプロットしたものである。根の国の中心、安来には派遣が無い。多くの御子達は根の国の安来から、島根半島や出雲の西部に派遣されたのだろう。神産巢日神が登場するのは、須佐之男命が、娘・伊邪那美命の子であるので、奴国を捨て須佐之男命の国造りを支援に出雲にやってきたものと考えられる。

大国主が戦った八十神は、この須佐之男命と神産巢日神の御子達と思われる。大国主命の名は、これら八十神との戦いの中で、須佐之男命からもらった名前である。

大国主命の国造りは、時の有力者との血縁関係を深め

る作戦の国造りだったと思われる。須佐之男命の娘・須勢理比売、越の沼河比売、宗像三神の多紀理比売 神産巢日神の娘・^{またまつくたまのむらひめんのみこと}眞玉著玉之邑日女命など著名人の娘と結婚をしている。灌漑稲作などによる開拓が当時の国造りだったと思われるが、これに関する伝承は少ない。

6、何故、ニニギは出雲に向かわなかったか

記紀は、国譲りが終わったので、天孫ニニギの命を天降らすことにしたと記している。写真2は高千穂町にあるニニギの石像である。ニニギは、国譲りされた出雲に向かって良いはずだが、反対に南の高千穂に向かっている。



写真2 天孫降臨の石像

これは、国譲り交渉の中で生まれたニニギが、交渉が長引くなか、すでに少年になっていたのに、南九州の投馬国建設に向かわせたもので、全体の神話の話を分かりやすくするために、国譲りが終わったのでと記したものと考える。

高天原は「しらす国」の建設を目指していたので、ニニギに多くのスタッフを伴としてつけ、南九州の灌漑稲作の普及にあたらせていた。この開拓による国造りに日向三代が費やされたわけである。

もし国譲り後すぐ、まだ少年のニニギを出雲に派遣していたならば、「うしはく」とあまり変わらない、力で出雲をねじ伏せて年端もいかない「少年」を王としたとのそしりはまぬがれなかったと思われる。

図9は南九州の「宇都」という地名の分布で、ニニギの天孫降臨の際に名付けられたと思われる。訪ねると、ほとんどが灌漑稲作の水が得られる川の、田んぼのある最上流に名付けられた地名だった。ニニギは、まず水利権を確保し、民に公平に水を分け与えるための基盤を造ったものと考えられる。大国主の「うしはく国」とは完全に異なる国造りだったことが分かる。

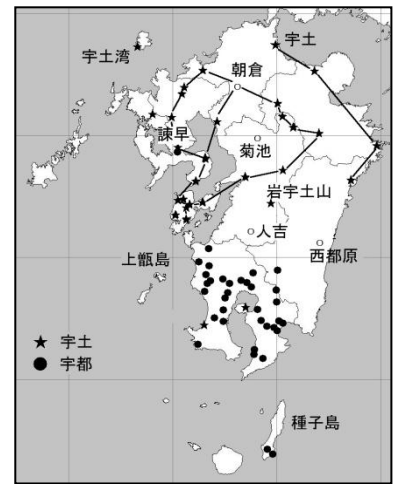


図9 宇都の分布

7、国譲りはいつのことか

国譲り交渉に、天菩比神が最初に派遣されて、次に子供の武三熊大人、さらに天若日子と、

その帰りを待ち続けた期間は11年もあったと記している。いつごろから「国譲り」を迫りいつ完了したかを推測してみた。

伊邪那美・伊邪那岐の名前が、魏志倭人伝に登場するクニの名前から一文字ず

	卑弥呼の共立	誓約	天の岩屋隠れ	通運命の誕生	天孫降臨	須勢理毘売の誕生	山幸彦の誕生	大国主命の結婚	事代主命の誕生	鵜茅草葺不合命の誕生	神武天皇誕生	卑弥呼の死	国譲り	神武の後誕生	最後の遣便	神武東征出発	神武東征終了	神武結婚	神武即位	
神武天皇											0	3	11	15	20	25	30	31	32	
鵜茅草葺不合命										0	4	7	15	19						
豊受大神													11	19	23	28	33	38	39	40
山幸彦							0	13	15	16	20	23	31				45			
通運命				0	12	13	16	29	31	32	36	39	47							
忍穗耳命		13	14	18	30	31	34	47												
天照大御神	13	19	20	24	36	37	40	53	55	56	60	63								
須佐之男命	11	17	18	22	34	35		51												
須勢理毘売						0		16	18											
大国主命								20	22						38					
事代主命									0						16	20				
伊弉諾命 又は五十鈴姫命															0				16	
西暦	198	204	205	209	221	222	225	238	240	241	245	248	256	260	265	270	275	276	277	

内の値は想定年齢、西暦の太字は魏志倭人伝から導いた西暦です。

図10 国譲りのシミュレーション

つ採った名であることから、二人は倭国乱を収束させるため別天つ神五柱の神が伊都国王家の男子と、神産巢日神の娘を結婚させたと考えている。

そうすると、倭国乱のあった光和年間の終わるころに二人は結婚し、生まれた長女の天照大御神（卑弥呼）は200年直前に共立されたと推測した。

また、天照大御神の末裔・神武と、弟の須佐之男命の末裔・伊須気余理比売が結婚していて、世代交代がシミュレーションしやすいので、シミュレーションしてみた。図10。

その結果、天孫降臨は221年頃におこなわれ、国譲りが完了したのは、天照大御神（卑弥呼）死後の256年頃に模擬された。国譲りは、豊受大神の時代に完了したと推測している。

8、国譲りと豊受大神

建御名方神は、国譲りに反対したが、大国主命と事代主命は、高天原が進める「しらす国」を理解したようで、国譲りは意外とすんなりいったように見える。

しかし、この国譲りの成功には豊受大神の働きがあったと思われる。魏志倭人伝によれば、天照大御神（卑弥呼）が亡くなると高天原は男王を建てたが国中は不服であった。そこで、こもごも相誅殺し千人が死んだと記している。ここで、高天原が建てた王は、投馬国のニニギ命かその子・火遠理命こと山幸彦と思われる。

一方、出雲は大国主命またはその子、事代主神を建てたと考える。丹波の火明命こと、饒速日尊も立ったかも知れない。

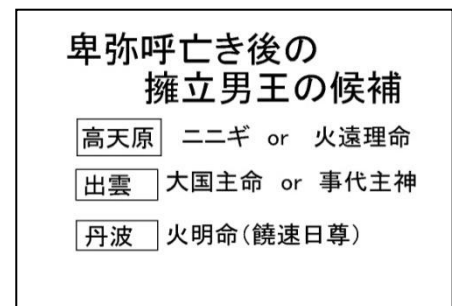


図11 擁立男王の候補

結局、13歳の娘、台与（豊受大神）が共立されて、国はついに収まったと記している。13歳では鬼道を使うわけではなく、また人柄でもなく魏志倭人伝が記すように宗家の出身だったからまとまったのである。豊受大神（台与）の出自について、古事記は国生みの段で、和久産巢日神の子は豊宇気毘売神と記している。

須佐之男命段では須佐之男命が、大山津見神の女、神大市比売を娶って産める宇迦之御魂神と記している。伊勢外宮では、宇迦之御魂神は豊受大神の別名であるとしている。

日本書紀では、伊邪那美命の死の原因とされる、迦具土神は埴山姫をめぐって和久産巢日神を生んだと1書第2で記している。これらを総合すると、豊受大神は須佐之男命の娘で、天照大御神が亡くなって出雲や高天原は男王を建てたが決着しない中、出雲から須佐之男命の娘・豊受大神（台与）が共立されて国中が収まったものと考えられる。

この共立に活躍したのが和久産巢日神と思われる。産巢日がつくこの名は2代目の日の神・豊受大神を生んだ功績の名付けと思われる。豊受大神の系図を作成すると図12のようになった。

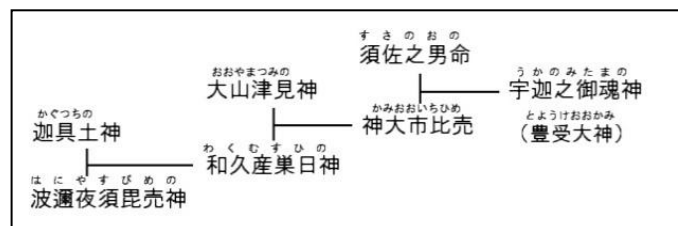


図12 豊受大神の系譜

和久産巢日神は、国生みの中、阿波で生まれ須佐之男命と幼馴染だったと思われる。そこで須佐之男命が出雲に進出すると、跡を追って出雲にやってくる。男王が立つも国中が乱れる中、和久産巢日神は出雲から高天原にやってくる、すでに亡くなっている須佐之男命の心を代弁し、須佐之男命の娘の女王への推戴をおこない、認められたものとする。

これならば 13 歳の娘が共立され国中が収まった理由が納得できる。しかも、出雲の須佐之男命の娘が、2 代目統一倭国の女王に抜擢され、出雲の国譲りを指揮しているとなれば、大国主命や事代主命も反対する訳にはいかなかったと考える。豊受大神の共立と、豊受大神自身の知らず国への賛同が、大きく「国譲り」を前進させたとする。

諏訪に逃げた建御名方神は、善光寺の戦いで負けて諏訪に向かう途中、上田で「生島神・足島神」をお祀りしている。その「生島・足島」とは、「高天原は、これまで十分に島を生んだのではないか。島は足りたのではないか、何故、そんなに追ってくるのだ。」との問いかけと思われる。

建御名方神は「うしはく国」「しらす国」の違いが分かっていなかったようで、諏訪に入った後、先住の守谷の人々と戦い、勝って諏訪の主になったと伝わる。

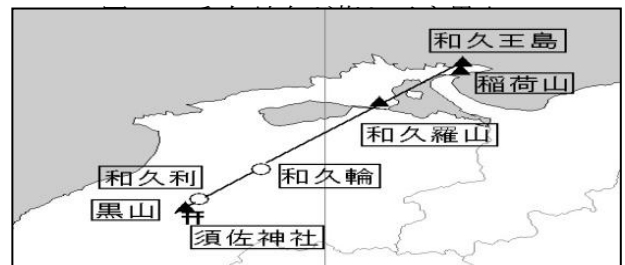
とはいえ、高天原は建御名方神を国づくりの功労者と考えていたようで、天孫降臨のあった鹿児島には多くの南方神社が見つかる。また東征後に豊受大神が奈良で国造りの功労者に感謝の報告をしたと思われる、天照御魂神社の祭神に建御名方神が含まれていた。



写真3 生島足島神社

安来市の南にある能義平野に宇賀荘という集落があり、そこが豊受大神の生まれ里と思われる。

和久産巢日神の須佐之男命への思いを最近、地名に見つけたので、最後に案内する。須佐之男命の陵は、出雲市佐田町にある黒山山頂と言われている。その黒山に向かって、和久という地名が島根半島から直列していることが分かった。松江市には和久羅山が、島根半島北岸の港の沖には和久王島や、島根半島に稲荷山が見つかる。豊受大神が神武東征の際に、故郷の出雲に戻り名付けたものとする。



以

上